

地域的多様性と育児
——福岡市と徳之島を事例として——

○益田 仁（中村学園大学）

1. はじめに

「子宝の島」徳之島にて。「子どもはあと何人くらい欲しいですか?」、「なぜ子たくさん?」、手を変え品を変え、聞き方を工夫するものの、眉をひそめる人も。いやはや、何とも「下世話」な調査のような気もしてくる。そもそも、報告者が徳之島に出かける際、配偶者から詰問された。「なんし行くと?」「え、子育て調査に」「なんで徳之島?」「子たくさんだから」「は?どうやって調べると、それ?! だいたい、徳之島の前に、まずワガイエの子育てせろさ! (しなさい! の意)」と言われる始末。ごもつともなことで…。

しかし、「どうやって調べるのか」は、存外大切な論点だと、改めて思う。報告者らはアンケート・インタビューという方法を用いたが、果たしてどこまで切り込めているのか、心もとない。さらに、報告者自身は家族研究を専門にしているわけでもない。しかし、徳之島（あるいは南西諸島）に息づく言語化しにくい漠たるものについて、それを何とか掴もうとして調べたことを示しながら、その答えについて願わくは会員の皆さまと一緒に考えてみたい。

2. 報告概要

出生率は、結果的な数値である。当該地域の人口特性に影響を受けるという意味ではブレやすいものかもしれないが、かなりの程度安定的に構造化されている指標でもある。それをひとつの手がかりとしながら、九州で出生率が最上位クラスの徳之島・伊仙町と、最下位クラスの福岡市・城南区において、育児や社会関係に関する調査を行った。本報告では、特に「ネットワーク」、「育児サポート」を主軸とした比較結果を発表したい。おおよそ、次のような流れを予定している。

- ①近年、九州地方の出生動向が、他の地域と比べて異なる傾向を示していることを、まずは確認する。
- ②その上で、その点に論及している先行研究を整理・検討する。
- ③続いて、離島ないしは農山村の出生・育児に関する研究および地域差に言及している先行研究を参照する。
- ④各ネットワークとの距離・そこから調達している育児サポート・配偶者の育児参加の度合い等を、福岡市と伊仙町とで比較を行う。また、文化的価値観（「子は宝」）についても検討する。

3. インタビュー結果（抜粋）

以下、報告のイントロとして、伊仙町でのインタビュー結果の一部を掲載（必ずしも報告のストーリーとマッチするものではないです）。

- ・きょうだい多くて自分自身が楽しかったし、自分もそのくらいは欲しい、という感じかな。(40代女性)
- ・3人産んで、余裕ができた時、もっと欲しいと思った。4人を超えると、4も5も6も同じ。(40代女性)
- ・(出生率が高いのは) 近くに親がいたりするのもありますし、「まあ何とかなるよ」って、親が言います、まず。「4人いても5人いても変わらないから、もっと子ども生みなさい」って。でも私なんか、4人、5人は、大学とか色々かかるし…って言うと、「どうにかなるよ」って言われます。(30代女性)
- ・(出産祝いに来る人は) とにかく多い、いっぱい人が来る。出産するより出産祝いの方が大変。(40代女性)
- ・子育ては楽だった、両方の親に手伝ってもらって。実家に行って子ども見てもらって、自分は楽する(笑)。ご飯食べて、お風呂入って。(60代女性)
- ・(頼るのは) まず旦那、その後、親という順。土日でも特にすることもないので、そもそもそんなに頼る必要性がない。親も自分のことは自分でしなさいという考えだし。(40代女性)
- ・伊仙は子育てに理解があるから、育休産休がとりやすい。それは保育職以外でもよく聞く。(30代女性)。
- ・周りの人に支えてもらえるのが徳之島、自分が頑張っていたのが〇〇だった。(40代女性)
- ・ほったらかしていても育つ、感じがする。(中略) 手がかからないというか、手をかけなくても何も言われない(笑)。(40代女性)

キーワード：育児ネットワーク、地域間比較、九州地方